

# 思い出の選挙戦



村上誠一郎 衆議院議員

昭和六十一年の衆参同日選挙の投票日の翌日、七月七日の午前十時半頃。愛媛県・今治市内のホテルで「当確ができました」との連絡を受けると、万歳コールや胴上げなど、支持者と勝利を味わいました。

そのとき苦楽を共にしたある支持者が「オヤジさんが墓の中で喜んで泣いているよ」と言った言葉が今でも胸に焼きついています。そしてこの選挙戦を通して経験した感動、感謝の念が私の政治家としての原点です。

大学生のとき、衆院議員の父・信二郎と参院議員の伯父・孝太郎が相次ぎ他界。五十三歳と五十四歳の志半ばの死でした。「政治家は国家・国民の公僕である」は父と伯父の遺志。私は「親や兄弟が

死んでも、その志を受け継ぎ戦え」を家訓とする村上水軍の末裔です。墓前で「議席奪還を果たすと誓いました。

## この選挙戦の経験が政治家の原点

昭和61年 旧愛媛2区

二十七歳で今治市に帰ります。瀬戸内海に点在する島々を含む選挙区は、定数三で自民党の現・元職三人がしのぎをけずり、割り込みは至難でした。

東京育ちなので同級生もいません。既に父の後援会は草刈り場となり、かつての父の支援者からは「あなたが出馬するのは迷惑だ」と言われる始末です。あるのは志だけ。まさにゼロからの出発でした。

腹を決め、できるだけ多くの有権者と会い、自分の考えや志を訴えました。朝の六時に家を出て深夜に帰宅。そんな活動を積み重ねる日々でした。初挑戦は昭和五十八年の総選挙でしたが、七千七百票差で敗退しました。しかし、めげることなく、十人程度の座談会を続けました。

こうした会合を千回ほど重ねた昭和六十一年六月。いわゆる「死んだふり解散」によって、一気に選挙戦に突入します。

期間中の睡眠は、合計約五十時間。死にもの狂いで、一日に約三千人の有権者と手の皮が剥けるほど握手しました。反応が良くバットの芯に当たる感触があり、ついに初当選を飾ることができました。

思えば父の死から十五年。長い道のりでした。この間、多くの人から真心をもらいました。半年ほど肺炎を患い、咳が止まらず寝込んだことがありますが。この時が一番辛かったのですが、支持者が毎日、病院に食事を届けてくれました。

また、資金が底を土発展のためにと、

若い私の志に賭け、援助してくれる人がいました。陰に陽に支えてくれた多くの人がいたからこそ当選でした。それが私の政治家としての自信と誇りであり、だからこそ支持者の皆さんの期待を裏切るわけにはいかないのです。

この日、事務所に掲げられた父の遺影に手を合わせ、誓いました。「厳しい選挙活動を戦い抜き、有権者に人生を捧げる真の『公僕』になれた。この思いを決して忘れない」と。



1日約3000人の有権者と握手を続けた